

いぶき 15 号平成 24 年 4 月

世界の偉人たちの「驚きの日本発見記」

第14回：バシル・ホール・チェンバレン（1850～1935年）

「絵画や家の装飾、線と形に依存するすべての事物において、日本人の趣味は渋み —— の一語に要約できよう。大きいことを偉大なことと履き違えているこけおどし、見せびらかしと乱費によって美しさを押し通してしまうような俗悪さなどは、日本人の考え方のなかに見出すことはできない。（中略）金持ちは高ぶらず、貧乏人は卑下しない。実に、貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない。ほんものの平等精神が（われわれはみな同じ人間だと心底から信ずる心が）社会の隅々まで浸透しているのである。」

（出典『日本事物誌(2)』平凡社東洋文庫）

1873 年 23 歳でお雇い外国人として来日し、1886 年に東京帝国大学文科大学教師となったチェンバレンは、19 世紀後半～20 世紀初頭の最も有名な日本研究家の一人であり、俳句を英訳した最初の人物の一人でもあります。彼は、日本について “A Handbook of Colloquial Japanese”、“Things Japanese”、“A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing” などの多数の著作を残しています。なかでも、“Things Japanese”は『日本事物誌』と訳され、各項目についての解説がアルファベット順に並べられた一種の日本文化辞典として興味深い読み物です。この本でチェンバレンは「ヨーロッパが日本からその教訓を新しく学ぶのはいつの日であろうか —— かつて古代ギリシア人がよく知っていた調和・節度・渋みの教訓を ——。アメリカがそれを学ぶのはいつであろうか —— その国土にこそ共和政体のもつ質朴さが存在すると、私たちの父祖達は信じていたが、今や現代となって、私たちはその国を虚飾と奢侈の国と見なすようになった。それは、かのローマ帝国において、道徳的な衣の糸が弛緩し始めてきたときのローマ人の、あの放縦にのみ比すべきものである。」と記しており、文中の随所に鏤められた鋭い皮肉やユーモアとともに、日本と日本人に対する深い理解と愛情を感じることができます。（M.I.）